

- 臨場感あふれる生放送での殺人事件!?
- 宵闇に響く錫杖の音
- やっぱり本が好き
- 見守り隊員になる

臨場感あふれる生放送での

殺人事件!?

『なんで死体がスタジオに!!』では、生放送のテレビ番組「ゴシップ人狼」を実際に観ているかのように話が進みます。失敗続きでがけっぶちのプロデューサー幸良涙花(こうらるいか)を中心に生放送のドタバタが描かれる、お仕事ミステリ小説となっています。

出演者たちが持ち寄ったリアルゴシップトークから嘘つきを推理する番組で七人の出演者が登場。出演者側、プロデューサー側の視点が切り替わりながら話が進行していくので、制作側の生放送のドキドキ感が味わえるのが新鮮です。

読み手を騙そうという要素が、各所に散りばめられているので事前情報なしで読んで欲しい本ではありません。しかしながら、七年前に流馬(にれいさま)という人物のトークパートについては語っておきたく残そうとするあまり放送事故すれすれになっているところはページを捲る手が止まらないくらい面白く、本題の殺人事件とは違った

緊張感が絶妙でそこで一気に心をつかまれました。

著者は一九九〇年代生まれで、作中ではテレビ好きの幸良の知識語りとして実在のタレントやテレビ番組の名前やエピソードが多数出てくるのですが、同世代なので分かる部分も多く、楽しめました。

まだ数作しか書いていない著者ですが、もっと他の作品も読んでみたいと思わされる良作です。



唯一無二の問題作

これまで読んだことが無いミステリ、ということでは間違いなし。本格ミステリ好きの為の挑戦状とも言うべきミステリ。ですが、そもそも本格なのかどうか議論が分かれるところ。舞台が富山県だか

ら入り込みやすいだろうと、軽い興味で読むことを決めたのですが、『雷龍楼の殺人』は、なかなか厄介な問題作でした。

随所に違和感を覚えながら読み進めていくと、ラストに向かつて予想を超える急展開に。いきなり頭がついていかなくなります。読み終えた直後は、騙されたという鮮やかな余韻、ではなく、むしろ呆然という言葉が合う読後感に。真夜中に読み終えるには全く向いていない本でした。

翌朝、気持ちを整えて、改めて最初から読み直してみると、破綻の無いように練られた構成の緻密さに、作者の頭の良さを感じました。作中において、作者の考えを代弁する登場人物たちによって語られる深いミステリ作品観やミステリ講義に對して、「そういうことを伝えたかったのか」と納得。謎解きは、フェアでなくてはいけない。今作のプロットを世に解放するにあたっての作者の強い信念が伝わってきます。

あらゆる手法が出尽くしたと思われる世界で、新しいものを創り出して世に放つという心意気に非常に感心。二度読んでみて、価値のある本に出会えたと思えました。作者の新名智は、作品発表当時三十二歳。とあるインタビュー記事によればアイデアが頭の中にたくさんあるということ、これからの活躍がとても楽しみな作家の一人です。

こんな会社

辞めてやる!



城戸川りょう

ほのぼの ホラー?

高宮麻綾は猛烈に怒っていた。渾身の事業企画(メーグル)をひっさげ社内ビジネスコンテストで優勝したにも関わらず、二十年前の事故を引き合いに事業化を潰されたからだ。しかし、高宮麻綾は引き下がらない。「なんであんなたちの意味わかんない論理で、あたしのアイデアが潰されなきゃなんないのよ!」と怒りのエネルギーと持ち前の行動力で、事業化の障害になっている事故を調べ(メーグル)の実現を目指す。

毎回「友達から聞いた話なんだけどね」から始まる(隣に住んでいる友人)によるこわい話。話の内容よりも問題なのが、そもそもこの隣人が(おそらく)人外であることである。そして本のタイトル『入居条件:隣に住んでる友人と必ず仲良くしてください』にある通り、(仲良くしてください)にある通り、(入居条件)の話。

ええ、高宮麻綾は大変すぎる人で、溢れる麻綾の行動を文章で読んでいただけで、めまいが...そんな一人で突っ走る麻綾は、いろいろな障壁を周囲の人々に助けてもらい、それを感謝できる女性に成長していきま

本書『高宮麻綾の引継書』は二〇二四年度の松本清張賞の次点でした。通常は受賞作しか刊行されないところ、作品のエンタメ性が高く異例の発売になったとのこと。事故の真相究明というミステリ要素もありつつ、かなりパワフルなお仕事小説に仕上がっています。社内政治についてうだよな...麻綾のように痛快にやるとやりたいな...と組織勤めの方の心に刺さるか。秋には続編も出る予定で今から楽しみです。

隣人の「こわい話」自体はそれほど変わったものでもない。でも反応を間違えたりどうなるかわからない出来事が主人公の身の回り起こっている。それなのに全体的にはなぜかほのぼのとした日常系の雰囲気を感じられる、不思議な作品で、ただホラー小説には間違いのないのである。この著者の作品は今作が初書籍化だが、小説投稿サイトでは他作品も投稿されている。それらの物語もうまく表現しにくい不思議な世界観を感じる作品ばかりである。実はホラー小説は苦手なのだが、この著者の作品は気になって以前からチェックをしていたところ書籍化となった。少し変わったホラーが気になったらぜひ手に取ってみて欲しい。

宵闇に響く錫杖の音。

摩訶不思議なモノガタリ

はじまり、はじまり。

仕事柄、趣味嗜好以外でも本を読む。普段は理學本をメインに読んでいる私が、久方ぶりにページを繰る手が止まらなくなった小説であるので、紹介させていたただこうと思う。題は『カタリゴト』。著者は柴田勝家。いや、戦国の世を生きた武将ではなく、現代を生きる作家である。

舞台は大正時代。鬼やそれを退治して回る剣士は登場しないが、妖怪変化を疑う奇妙な事件が巷を騒がせていた。事件解決を目指す主人公元雪（もとゆき）は、奇妙な大道芸人湖月（こげつ）と出会う。湖月が演ずるは浪曲の一種、観客から小話をもらい、即興の物語を組み上げる「カタリゴト」なる芸。その妙技に感心した元雪は湖月に助力を仰ぎ、さまざまな事件を解決していく。そしてそれらは帝都を騒がす大事件「華族殺し」に結びついていくのだが……。角川ホラー文庫から発刊されているが、ミステリ色の強いエンタメと言った方が妥当であろうか。

本作の魅力はいくつかあるが、最初に感服したのは大正時代描写の精緻さである。江戸、明治と経た

古の時代の仄暗さに文明の輝きが眩い、独特の色調が克明に描かれている。読むに従い、大正時代の解像度が上がることだろう。

しかし最大の魅力は、やはり湖月の芸「カタリゴト」だ。個々の作話も表と裏が用意されており、独特な語り口も軽妙。推理の披露といえはそれまでであるが、真実とも虚実ともつかぬそのカタリは、一つの物語としてリアリティがあり、読み手（聞き手）を引き込むのだ。

そんな調子で、時代背景、魅力的な人物と事件、軽妙なカタリに乗せられて読み進め、辿り着く最終章。それらが混然一体となった何か得体のしれない化物が立ち現れる。その衝撃たるや筆舌に尽くしがたいものがあるので、ぜひ読んで確かめていただきたい。私同様、柴田勝家氏の『カタリゴト』術中にはまってしまった、すなわち湖月のファンになってしまったなら、私としても嬉しい限りである。



⑤

読んだら、

終わり

後味の悪いものが好物だ。映画「ミスト」におけるステイヴン・キングの原作にもない結末はすばらしい。「フアニーゲーム」の巻き戻し演出ほど心が躍ることはない。「縞模様のパジャマの少年」における純真無垢ゆえの死。最凶「セルビアン・フィルム」はこの世のものとは思えない。

後味が悪い小説といえば角川ホラー文庫が手放せない。一時、キャラノベに頼る傾向があったが、ここ数年ホラーに帰来した。そんなレーベルの一作『あかずめの匣』の著者は年若いながら、人を絶望に陥れる筆致がうまい。各章ともに幸福なオチはないので、誰もが助からないというホラーの定義は満たしている。『リング』を生んだレーベルだけに今回もある呪いがテーマとなる。観たら呪われる・家に入ったら呪われるなど呪いの設定は世の中に無数にあれど、今作の設定はなかなか斬新だ。呪いについて……たら呪われる。強烈なキャラクターが出てこなくても、十分に読み手を恐怖させるのは、澤村伊智や芦花公園の系統に属する。

ホラーの新たな書き手が増えるのは喜ばしい。ホラーを読んで呪われるなら本望だ。



⑥

ずっとドキドキ

するってある？

休日には、じっくり小説を読む時間がほしいと思うのですが、〈家の用事〉というやっかいなものに追われ、なかなか時間が取れずに残念な気持ちで一日を閉じることが多いです。しかし、今年に入って私の気分をあげてくれているのが、現代ショートシヨートの名手・田丸雅智さんの作品です。今回おススメするのは、

「いつ？何時何分何秒？地球が何回まわったとき？」という一冊です。タイトルにもあるように「いつ？何時何分何秒？」（雷が鳴ったらへそ隠せ）など子供の頃から聞き覚えのあるフレーズをテーマにした短編集です。

印象深かったのが体育館でのワンシーンです。全校集会で私語が収まらない生徒たちに「静かになるまで五分かかりました。」と司会者が注意をします。誰しもが

経験したことのあるようなシーンですが、そこから想像させる静まり返る空気感や、それでもヒソヒソ話したい一部の生徒。それを横目にハラハラする生真面目な生徒の心情など、ひとつのシーンからピリッとする緊張が次々と押し寄せました。二ページ目に進む頃には、すっかり小説の世界へ没入することができました。

ショート作品ながら、すぐに物語の世界観に浸ることができ、このようにラストまで途切れさせない緊張感、この著者の最大の魅力だと思えます。



⑦

冷ややかな悪魔

成人病予備軍、体脂肪率が高いからと海外出張不許可と会社から言い渡されたユカリ。生きがいの出張復帰のため頑張る話かと読み進めると驚きの展開でした。

ユカリは体脂肪を減らす目標達成のためジムでの運動と食事制限に励みます。ジムで頑張ろうとするもパーソナルトレーナーとの会話にはお客側にもコミュニケーション能力が必要で、若いトレーナーの気さくな会話に苦痛を感じます。久

し振りに本社勤務になったことで
自身のアラフォーという自分の状
況に気づかされ考えるようになり
ます。

そんな時、偶然ジムで拾った結婚
指輪を薬指にはめてから物語は大
きく変わってきます。人のものをな
ぜはめるのか驚きの行動です。結婚
している、子供がいる、幸せな嘘の
設定を話すと周りのユカリを見る
目が変わり会話が弾み、嘘に嘘を重ねる状態。『冷やかな悪魔』指輪の力を借りていきいきするユカリの姿は面白く、いっぱい読めるのかミステリーなみにドキドキする展開です。

石田夏穂さんの文章はテンポよく面白く読み終えました。この作品は既婚か未婚かをどこか気にする社会に対して痛烈な皮肉が読めると思います。

やっぱり本が好き

小学生の頃、図書室の本を全部読んだことで表彰されたことがある。各学年一クラスしかない小学校だったが、孤独と疎外感を感じていた私にとって、それは、〈目的〉ではなく〈結果〉だった。

本を読むことで一日一日、前を向くことが出来、物語の世界に入ること、主人公が友達のように感じて、ずっと話しかけ、しゃべり続けていた。そんな記憶が甦った一冊の本を紹介。

『物語を継ぐ者は』は、中学生の結芽が急逝した伯母の部屋で愛読する児童書の原稿を見つけたことから始まる。亡くなってはじめてその存在を知った伯母。その人はかつて、結芽を現実の世界から救ってくれた児童文学の作家だった。「大好きな本が未完のまま終わるのは嫌だ」と思った結芽は物語の続きを書くことに。思春期の苦悩とありあまるエネルギー。現実と創造の世界の狭間で、葛藤しながら成長していく姿はキラキラと眩しく、読む者に自信と勇気を与える。無心で本を読みふけていた時代がほろ苦くも懐かしく思い出された。

実石沙枝子氏の著作は四冊とまだ少なく、『17歳のサリダ』もおすすめ。近著は超能力一家が舞台の『扇谷家の不思議な家じまい』こちらも楽しみにしている。



実石 沙枝子

また日記

始めてみようかな

私にとって日記とは、自分の中の陰の部分の象徴に近い。何年か一度、今年こそは日記を付けようと始めては飽き性の私は一か月も持っ

たためしもない。かつ、日々の嫌な事をここで吐き出してみたらすっきりもしなかった。日記とは持続性のある人だけのものと思っていた。

芥川賞候補にもなったことがあつて、くどうれいんの『日記の練習』の冒頭を読んで驚いた。日記とは「日々を記録しようと思った自分の記録」であり、「大事でないことから残されていく」そんな風に思ってた事はなかった。実際、四月から「日記の練習」は始まり、中には一行「ピスタチオについて一五分ほど語る」という日もある。つい、十五分も語る事あった！と突っ込んでしまった。月の最後にはその月を振り返った「日記の本番」があり、緩急のついた一本のエッセイが完成していき、この何気ない日々を流していくのではなく、切り取って鮮やかな言葉で仕上げていく様には、さすがだなと思わずにいられない。

そういうえば、引越越す際にかつての陰の日記を発見して、見返したところ「正月早々、ひどかった」とだけ書いてあった。何だったわけ？と考へても思い浮かばずに、逆に面白いと思つた事を思い出した。そういう事かもしれない・・・多分。



タイ。パコス。ハの

向こう側

店頭で表紙と目が合うエッセイはハズレが少ないように思う。

『落雷と祝福』は白いムク犬が、『メルカリで知らん子の絵を買う』は著者がメルカリで購入した絵の模写がこちらを見つめていた。

『落雷と祝福』の著者、岡本真帆はコピーライターからマンガの編集に転職し、高知と東京の二拠点生活の会社員をしつつ、SNSでもバズった歌人。代表作は、
〈ほんとうにあたしでいいの？ずぼらだし、傘もこんなにくさんあるし〉

ああ、この短歌の人かと思いつながら、著者の好きなものについての短歌とエッセイの組み合わせは楽しめた。(代表作の影響もあり、第一歌集『水上バス浅草行き』は短歌集では異例の2万部越えの売行)

『メルカリで知らん子の絵を買う』の著者、藤原麻里菜は無駄づくりを掲げた発明や工作で人気。二〇二一年にはフォーブスジャパンが「世界を変える三〇歳未満の日本代表」として選出した発明家で、表題作にもなっているエッセイは気持ち悪そうではつくりする結末が

トリッキーでおかしいけど、どこか気持ちが悪くない。絶妙な著者の行動にふきだして、苦笑してしまつた。

二人ともタイパコスバの対極、ずれていることに真摯に向き合っていて、読み終わった後になつて、その時の自分の気分に必要なものに惹かれているな、と思つてしまつた。



東京生活エッセイ

『ここで唐揚げ弁当を食べないでください』はおそらくBの鉛筆で書いてあります。やわらかくて、思わず読み続けてしまいます。懐かしくもなります。

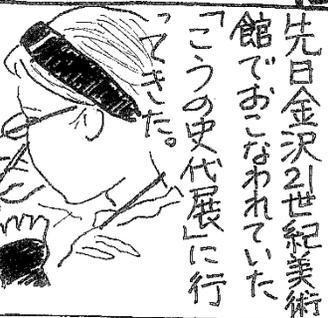
深夜に友達と二人で海を見に行つて、喫茶店で早朝のトーストを食べる話が好きです。最後に寂しくなります。どの楽しい出来事も薄く、目が覚めている間はずっと存在している不安や寂しさが入っている気がします。そのなかで、尻と少年という話も好きです。この話の明るさは高純度、安心して楽しくなれました。

カケオくん

42

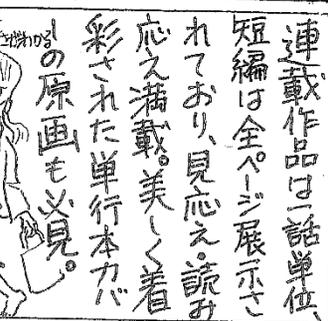
先日金沢21世紀美術館でおこなわれていた「この時代の展」に行きました。

漫画家生活30周年にして初の大回顧展だ。



代表作『夕風の街 桜の国』『この世界の片隅に』はもちろん、初の商業出版作品『見開き二ページ』に描かれる男女二人が、三〇〇枚以上の原画が並ぶ庄巻の展示。

連載作品は「話単位」短編は全ページ展示されており、見心え、読み心え満載。美しく着彩された単行本カバーの原画も必見。



一番の驚きは「この展覧会」本人が館内で作品制作する日に当たったこと。

「おつかれ様です」と言われてきたことをうれしく思っていた。



【書誌情報】『この時代の展』鳥がとび、ウサギもはなて、花ゆれて、走ってけて、長い道のり』この時代の展／青幻舎 三三〇〇円（本体価格）

見守り隊員になる

気になる人ができた。読んだのはエッセイで『わたしの言っていること、わかりますか。』懐かしくて切なくて心が震えた。懐かしさを感じはしたが、著者は一九九六年生まれ、三十歳年下である。

自分の話が伝わらない、周囲の人の言葉を深読みする、近親者の言葉遣いに違和感がある、言葉で表現することにこだわる、わからない言葉を経験をしながら調べる、など似たような心のなかのあれこれ、心のひだが、丁寧に淡々とつぶらされているのも好ましい。

彼女と自分の経験は似ているが同じではない。それぞれへの対応は大きく違う。話が伝わらない時、彼女は端折らず丁寧に伝えなおすが、自分は一瞬で諦める。さしずめ、わたしの言っていること、わからないですよね、だ。通じなくて当然の世界で生きてきたのを懐かしく思い出した。

言葉にこだわっているはずなのに雑な話をしてしまい後で落ち込むのは似ているが、やっちゃったなと受け止める自分、気落ちして言



伊藤 亜和

動がやけくそになる彼女。気分が落ち込んでいる様子は、かわいそうでもっとよい表現を探すのは同じである。ぴったり合う言葉と表現の例えとして「桐箱の蓋」を使っていたことに、完全なる同意を捧げたい。

彼女を紹介するなら、セネガルと日本にルーツを持ち、日本語が大好きで日々「言葉にする」ことに一途に頑張る子、と伝えるだろう。親戚のおばちゃんのような気持ちで今後も彼女の言葉・作品を追いかけてい。どんな心の変遷をたどるのかを見守るのだ。

書くしかないひとたちに よるエッセイ集は 読むしかない

新しい書き手に出会いたいという読者は多いと思うが、こんな一冊はいかが。『書くしか』サブタイトルに「書くしかないひとたちによるエッセイ集」とあり、帯には「わたしたちは、書くしかないんです。『書く』をテーマに、書くしかないひとたち百十三名によるエッセイを収録」とある。版元は神戸のひとり出版社・EYEDEAR。「紙・WEBを問わず様々なプラットフォームで、多種多様なコンテンツを発信している文芸界隈。この深夜テンションにも似た、玉石混濁のごとき状態を『可惜夜（あたらしい）』と標榜し、今の文芸シーンを丸ごとぎゅつと詰め込んだ「文芸ムック『あたらしい』を出している。二号まで出ているが、当店では今のところ売上はない（密かに応援しているのだが）。ちなみに二号の特集は「青」。巻頭特集「物語のつくり方」の座談会には今村翔吾が参加、小説では犬怪寅日子・坂崎かおる・人間六度が、短歌で上坂あゆ美が、エッセイで木爾チレン・佐川恭一らも名を連ねており、未知の才能だけの雑誌ではないので安心を。

『書くしか』に話を戻す。執筆者一覧を見ても知ってる名前は三人しかいない。X投稿企画（「書く」を題材とした自由投稿）にポストし

た四八名に至ってはゼロ。一人見開き二ページのエッセイが続く。さて、何から読もうか。まずはEYEDEARの百百百（ささもも）さんのタイトルは「物語ジャンキー」。前半ページに幼少期から専門学校時代までに撰取した物語（絵本・児童書・ラノベ・ミステリ・SF・純文学・エッセイ・歌集・漫画・アニメ・ゲーム・映画・ニュース・ドキュメンタリー・ノンフィクション）の遍歴が、怒涛の固有名の羅列を伴い最小の改行で語られる。後半、就職と結婚によって激変した生活、気づけば三十代。燻っていた創作熱が再燃し、WEB小説投稿・同人誌製作・アンソロジー企画・文学フリマ出店に明け暮れる三年を過ごすも活動休止。それでも創作の思いやまず、ひとり出版社を立ち上げるまでが描かれる。『あたらしい』の創刊とあたらしい文学賞を主宰し、「物語ジャンキー」ぶりを遺憾なく発揮しておられる様がものすごい熱量で伝わってくる。

本当に「書くしかない」ひとたちが集まってくる梁山泊のような場なのであろう。残りのエッセイを読むのが楽しみだ。

